

A-5-7-f

口 供 登

5150-1

私ハ、認識番號一四五二八二・P/O「DENIS BRYAN」
デス。現在「ウオルファート・ハムフロン」附近ノ「
コスフォード」ニ駐屯致シ居リ、本郷地ハ「サレ
イ・ドーキング・デヨークビット・テラス・十五」
デアリマス。直轄シテ次ノ陳述ヲ致シマス。

一九四四年九月九日午後、英蘭混成俘虜部隊ハ
私、P/O「G. CRANFORD」(後ニ、マロス丸船中ニ
テ死亡ス)蘭印軍陸軍大尉「VANDER LOCK」及ビ、
蘭印軍軍醫大尉「BRYAN」ヲ含メテ、總數一五〇
名デアツタ。此ノ俘虜部隊ハ、二名ノ蘭印軍將校
以外ハ、全員ガカナリノ病狀ヲ示シテ居タ。實際
大多數ノ者ハ陶氣デ身體ガ痺レテ居タ。俘虜部隊
ハ、南緯三度四〇分東經一二八度三五分ニ位スル
「アンボン島」若クハ(アンボイナ)群島ノ「ア
ンボイナ町」デ日本ノ小貨物船ニ乗ツタ。一九四
四年九月十六日、セレベス島「ラヘモモエナ」ニ
到着シ、「カイス丸」ト云フ六〇〇噸ノ日本船ニ
乗り換ヘタ。

俘虜部隊ノ管理ニ當ツタ上級日本人ハ栗島中尉
(原文ハ「クレシエマ」トアリ)デ、日本人軍曹
森ト倭人通譯笠岡カ之ヲ輔佐シ、約六名ノ倭人衛
兵ガツイテ居タ。

水へ一日二回給與サレ、ソノ全量ハ二分ノ一
 バイント「デアツタ。食物ハ、一日二回給與サレ、
 ソノ全量ハ一〇〇瓦（三・五オンス）ノ米粥デ、
 其他ニハ何モ與ヘラレナカツタ。

俘虜ス。全然救命帶ガナク、又其他ノ救命裝備
 モ皆無デアツタ。

一艘シカナイ船備附ケノ「ボート」ハ、靜海ニ
 四人ヲ收容シ得ルニ過ギナイ小ボートデアリ、筏
 ト云ヘル程ノモノハ全然無カツタ。

消火設備——無

船中ニ於ケル日常生活状態ハ極メテ悪ク、俘虜
 ノ中幾人カハ割當テラレタ場所ニ無理ニモ入り込
 ム事ガ出来ズ甲板ニ出テ行ツタ爲ニ、ソノ俘虜達
 ハ皆、森々實カラ威慄スベキ殴打ヲ蒙ツタノデア
 ル。

一・一・一・一・一・一・一・一

「カイス丸」ニ乗船シテカラ、其船ハ我々俘虜
 ガ以前ニ「アンボイナ」ニ於テ、爆彈・彈藥・石
 油・米及ビ種々ノ食糧ヲ積ミ込シタ同一ノ船デア
 リ、此ノ船荷ハ皆入口ニ扉ノアル船艙ニ適當ニ片
 附ケラレテ居ル事ガ判ツタ。

サテ、我々俘虜ノ居所ハ、此ノ昇降口ノ最上部ニアリ、日本兵ハ日光遮蔽用トシテ一丈ノ小防水布ヲ支給シテ呉レタケレドモ此ノ布ハ全ク不適宜ナモノデ大部分ノ俘虜ハ、寢テ、余儀ナク太陽ノ直射ヲ浴ビネバナラナカッタ。最初ノ二十四時間ハ、我々ハ少シモ飲料ヲ呉ヘラレナカッタノデ此ノ状態ハ更ニ悪化シタ。更ニ船ハ石油臭紛々タル鋼鐵船デカテノ加ヘテソノ位置ハ赤道直下ニ在ッタノデアル。

給水状態ハ、第二日目ニハ幾分良クナリ、二十四時間ニ各俘虜ハ大ヨソ二分ノ一「ポイント」與ヘラレタ。

食物ハ一日一食デ米 五十瓦デアツタ。我々が船艙ニ食糧ノアル事ヲ知ツテキタノデ日本兵ハ此ノ不足ナ食糧給與ニ就イテハ何等説明ヲシナカッタ。又日本兵ハイツモ船艙カラ米袋ヤ乾燥野菜罐詰ノ箱ヲ持ツテ行ツテ、沿岸ノ土人相手ニ鶏卵、果實、鮮肉其他ノ物品ト交換シテキタ。

俘虜達ハ、例ノ如ク救命帶モシクハ其他ノ救命裝備ヲ何モ持ツテキナカッタガ、日本兵ヤ鮮人兵ハ夫々自分自身ノ救命ヲ持ツテキタ。

5150-14

船備附ケノ唯一ノボートハ静海ニ大人ヲ收養シ
得ルダケノ小ボートデアツタ。

消火設備——無

醫療品——無。少クトモ俘虜ニハ何ニモ支
給サレナカツタ我々ハ自分達ガ携行シテキタ應急
醫療品ノ入ツタ極メテ小サイ箱ヲ所持シテキタガ
眞物ノ藥品ハ全く無カツタノデアール。

三人ノ俘虜ガ飢渴ノ爲ニ死亡シタノデ、第三日
目我々ハ日本兵ニセツト食物ト水トヲ増シテ呉レ
ト願ンダガ、彼等ノ返答ハ、若シ我々俘虜道ノ間
デ、金ヲ都合スルナラバ沿岸ニ行キ我々ガ食糧購
入ノ爲ニ都合シタ金額ニ應ジテ食糧ヲ購入シテ來
ヤウト云フ事デアツタ。日本兵ハ、一四七人ノ俘
虜部隊ノ糧出ニ對シ、マサシク二匹ノ山羊ト、各
人ニ四本ノ青イバナナ「トヲ持ツテ贈ツタ。然シ
ソノ二匹ノ山羊ハ、全然我々ノ爲ニナラナカツタ。
トイフノハ、ソノ食物ハ五分乃至十分位ノウチニ
海中ニ吐出サレル程我々ノ胃ノ具合ハ悪カツタカ
ラデアール。

全俘虜ハ起立スレバ勿論毆打サレルノデアールガ
今ヤ道フ事モ出來ナイ程ニ可キ悪化シタ状態ニ
アツタノデ、森軍曹ハ此ノ船中ニ於テハ何ノ處待

振リヲ發射スル機會ガ少シモナカッタ。

此ノ船ハ、或小島嶼沖ニ錨泊シテキタガ、九月二十日午後二時ニ至リ聯合國側四發リベレイター機ガ我々ヲ攻撃シ、船ハ火災ヲ生ジタ。

日本人工曹森、倭人樫山（原交ニヘ「カシアマ」トアリ）及ビ、倭人衛兵達ハ直チニ船ヲ見棄テタ。

日本人船長ハ船ハ船荷ノ性質ニ由リ彼分間デ爆發スル事ヲ指摘シテ、私ニ俘虜全員ヲ離船サセルヤウ命ジタ。日本人栗島中尉（原交ハ「クレシエマ」トアリ）ハ私ニ同様ノ命ヲ與ヘテ何故迅速ヲ要スルカ説明シタ。ソレカラ日本兵ハ船ヲ放棄シ私ヲ救シテ獨リデソノ作業ヲサタ。モウ一人ノ英人將校「P. CRABFORD」ハ完全ニ身體ノ自由ガ利カナカッタ、且ツ二人ノ和蘭人將校モ亦既ニ船ヲ見棄テ離船シテ居タ。然シ乍ラ、私ハ九名ノ生命ヲ失ツタノミデ、全俘虜ヲ皆ク離船サセル事ニ成功シタ。救命作業ヲ終ルノニ約一時間乃至一時固半カカッタ、カクテ船ハ遂ニ爆發シ、完全ニ姿ヲ消シテ了ツタ。

日本兵ハ、結局我々ヲ「ラハ・モエナ」ニ運行シ一晝夜假宿舍ニ宿泊シタ。

5150-6

殆ド皆ベテノ俘虜ヘ保護デアツタ。日本兵ヘ、
衣料ヤ毛布ヲ支給スルタメニ骨折ラウトモシナ
ツタ。我々ヘ陸上ニ幾多ノ日本軍隊ヲ見タシ、二六
ハ支給品モ亦在ツタニ遇ヒナイノダケレド。

其ノ陸上ニ居タ二十四時間ニ支給サレタ食物量
ヘ、各々七五瓦ノ握飯二個ト小サイ鍋一匹デアリ
同期間ニ於ケル水ノ供給量ヘ一人・二分ノ一「ベ
イント」デアツタ。

私ヘ、栗島中尉（原文ニヘ「クレシエマ」トア
リ）ト森軍曹ニ、モット水ト食物ヲ増ヤシ、何等
カノ軍帽・衣料及ビ毛布ヲ夫々支給シ呉レルヤウ
願ツタガ、何一ツ支給サレナカツタ。

負傷者ヘ當地ノ病院ヲ俘虜ノ「BRYAN」軍醫
カラ願急治療ヲ受ケタ。

一九四四年九月二十一日ノ夕刻、我々全員一三
八名ノ俘虜ト栗島中尉（原文ニヘ「クレシエマ」
トアリ）森軍曹並同及ビ倭人衛兵達ヘ日本船「マ
ロス丸」ニ乗船シタ。